

医事・文談 九百五十四 平岸 三八

《正岡子規(36)の続き》その242

子規と漱石(五十一たび続)

久保より江夫人の句をさがしたが、なかなか見つからない。

『女流俳句集成』(宇多喜代子・黒田杏子編、立風書房、二〇〇三年七月第四版)には、明治・大正・昭和・平成の81作家の一万二千余句が載せられているのに、より江の名はない。『より江句文集』の著作もあるのに、どうして名を逸したのであろう。

昭和4年9月改造社発行の『現代日本文学全集』第38篇の「現代短歌集 現代俳句集」中に、より江の句を見出した。30句載っているから、大体の傾向は察することができる。

かるたきれどよき占出でず春の宵
湯上りの素顔よろしき浴衣かな

病間やとる手鏡の梅雨ぐもり

第一句はトランプのひとり占いであろうか、なかなかハイカラな句だ。第二句は湯上りの自分へのナルシズムか。第3句は病のいとまの一齣である。

ホトトギス同人であるから正統派俳人であつて、しかも句材にも、表現にもなかなか新しいところがある。

もう一冊、前記の富安風生著「大正秀句」(日本秀句全10巻の第6巻)に、風生の鑑賞によるより江の句が掲載されている。もともと一九六四年十二月初版本の二〇〇〇年10月の新版で、春秋社の発行である。

この本にはより江についてかなり詳しい経歴も書かれていて、なかなか興味がある。

それによると、より江は「服部躬治による歌の道、夏目漱石、泉鏡花を師とする文章道、子規居士、高浜虚子、清原柳童による俳句道、それから学者の妻としての内助の道、花やかな社交街

道、険しい処生悪路、思索の寂しい道、より江の歩いた道にはいくつかの道が交錯して絡み合っていた」とある。

この引用は、池上不二子の『俳句に魅せられた六人のをんな』からのものだ。風生の説ではないようである。

険しい処生悪路、思索の寂しい道というのはどうであろう。帝大医学部教授夫人で、しかも当時耳鼻咽喉科の第一人者と目されていた人を夫としていた人が、険しい処生悪路を歩んだとは到底思えない。当時帝大教授というのはエリート中のエリートであつて、助教授などは格段の差のある年俸を給せられていた。それに臨床の教授は所謂特診料という収入があつた。

現に長塚節も明治45年3月24日、初めて久保教授による初診を受け、謝金10円を呈している。明治末の10円は今からはちよつと想像もできないほどの貨幣価値を有していた。

北大の初代の第一内科教授の有馬英二先生の自伝『わが七十七年の歩み』にも、特診料の収入が多分にあり、月給はそのまま残つたとの記述がある。内科と耳鼻科では、往診の依頼にも差はあるであろうが、経済生活が豊かなのは同じであつたろう。

人世行路難であつては、ひとの世話もできないであろうし、社交場裡に活躍もできない筈だ。

風生が福岡為替貯金支局長在任時、より江、柳原白蓮、野田勇夫人の三人は、福岡社交界の三羽鳥とうたわれたものだそうである。野田勇夫人について知るところがないが、柳原白蓮は、九州の炭鉱王と称された伊藤伝右衛門の妻で、筑紫の女王と呼ばれた美貌の歌人である。

家庭が面白くなくて、外に大いに羽を伸すということもなくはない。或は夫が家庭を省みない、そのうつぶんを晴らす為に華やかな社交界で、派手に振る舞うことは、処生悪路と同列に論ずることができるとあろうか。池上不二子という人の論もおかしいようだし、風生がそれをそのまま引用しているのもどうかと思われる。

表紙写真

水面を飛ぶ

旭川市医師会 梨木 寛

丹頂の飛翔は、青い空に高く飛んでいる姿が美しいが、小高い丘の上から青い湖面を超低空

で飛ぶ丹頂を見るのもきれいだ。特に波静かな水面では美しい影がうつる。